

トがある。わかりやすく静止画面にしてあるが、実際には多少の動きがある。この4枚を適当に並べて、ごく簡単なストーリー（文脈）にしてほしい]

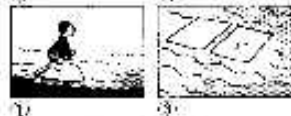


①刀を構えるサムライ  
②水に流れている1艘の船  
③2つに切られた船  
④一瞬光る刀

これは映画のコマ割りだと思ってほしい。これを並べ替えて意味が通じるようなストーリーにする。組み合わせ方は少なくとも30種類ぐらいある。3分ぐらいで、できるだけたくさん例を考えてみよう。

実際に、同書に引用されている浦岡氏の模範解答を以下に紹介する。

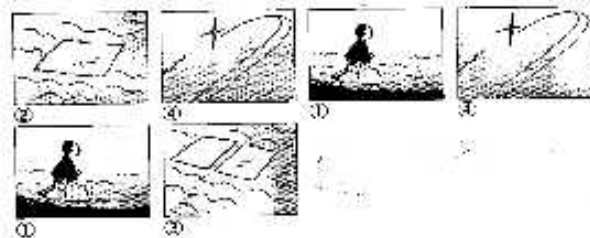
#### 「解答A」



「同一カットを二度ついているのに驚いた読者がいたかもしれないが、これは映画編集ではごく常識的な組み合わせである。まず川に船が流れている。川辺にサムライが立っている。サムライが何を見たかは、次の川を流れる船でわかる。そこに一閃、刀が振られる。刀を収めお

わったサムライが映る。バラリと船が切れる。ごくごく普通の文脈だが、一定の平均点はとれる」

#### 「解答B」



「サムライが船に向かって二度にわたって刀を抜いているところがミソだが、これはちょっとしつこい。サムライの執拗な性格を見せるにはいいかもしれない。画面のつなぎ方、アトサキのつけ方で、登場人物の性格までにじみ出てくるのである」

まったく同じコマだが、これを2回使うだけでサムライの性格の流れの中で見せることができるというのが肝心だ。映画を作るときにテロップとかナレーションで、「このサムライは非常にしつこいのであった」ということを言ってしまうと、興ざめであるが、たとえばこの手法を敵対者の場面にアレンジすれば、効果的だと思う。

#### 「解答C」





「これはかなり意外な展開になっている。切っても切っても2枚の紙が1枚にくっついてしまうというストーリーだ。ここでは、サムライというよりも紙が主眼として浮かび上がることになる。異常な紙だ。べつだんカメラが紙に寄りすぎると、そういう意味の効果が出る」

まったく同じ絵柄を材料としても、何を強調するかが必要になってくる。この場合は紙を強調している。その場合、下手な人はどうするかというと紙にズームアップしてしまう。そうすると、これ見よがしの感じになってしまう。説明的に過ぎる。あるいは、逆にいつまでたっても紙が目に入ってこないかもしれない。

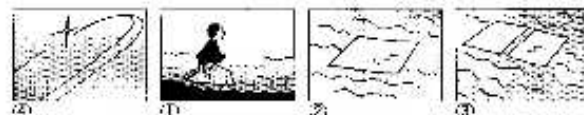
同じことがプレゼンテーションの資料を作る時にもいえる。下手な人のプレゼンテーション資料は、さまざまな色を使って、あるいはアンダーラインや斜体文字などを駆使して、見せたいところをとにかく直接的に見せようとする。そうすると、受け取る側はむしろシラケてしまう。演出をやりすぎること、何も自立できないということもある。むしろ主眼は、流れで見せることで浮かび上がってくるものなのだ。

「解答D」



「ごくふつうだ。それでも最初にサムライが映るか、流れてくる紙が映るかによって、多少の印象は違ってくる」

「解答E」



「4枚だけのつながりだが、これだけでサムライは剣の達人のように見える。最初に刀だけが一闪し、ついで刀を収めた辻人が静かに映っている。そして、いったい何が起こったのかと思うと、流れに深く1枚の紙がクローズアップされて、それがやおら真っ二つに切れる」

こちら辺りが編集の醍醐味、情報を解釈して再構築するというところのパワーなのだ。もともとの素材はまったく同じ4枚のコマなのに、組み合わせ方で意味合いがまったく変わってくるのがわかるだろうか。

### 情報を編集することの重要性は、 ビジネス全般に共通する

情報の編集ということについて、映画のコマ割を題材としたが、実は我々も意識するしないにかかわらず、日常生活で同じことを始終やっている。たとえば今日1日の出来事を誰かほかの人に説明するとする。ある会議の内容でもいい。どのくらいに要約するだろうか。3分だろうか、10分だろうか。その時に、すでに編集作業は行われている。たとえば2時間の会議の話をも2時間かけて聞きたい人間はいない。話すほうもそれは不可能だ。だからダイジェストという編集を行う。もちろん、時間の短縮だけではない。人が誰かに何かを伝える場合は、主観的な判断や選択が入るのが